

審査の結果の要旨

論文提出者氏名

ゴメス タグレ モラレス、ホセ マルティン

本論文は、現在のメキシコ合衆国内に遺っている植民都市について、その創建時の姿と現状とを重ね合わせることにより、都市構造を規定している幾何学的な要因の果たしてきた役割を分析したものである。南北アメリカ大陸には15世紀以降、数多くの植民都市が建設されている。その担い手となったのはスペインやポルトガルからの植民者であるが、新たな都市を建設するにあたって、街区構成や街路構造に幾何学的に厳密なルールを適用している。それはヨーロッパ本国におけるものとは異なり、ルネッサンス期の空間概念を色濃く投影したもので、当時の統治者が理想とした都市像が具現化されている。こうした都市構造の規律は当初は国王や行政官の指示として文書化されていたが、それらを法令として集大成したものがフェリーペ2世が公布したいわゆる“フェリーペ2世法（1573年）”と、カルロス2世による“カルロス2世法（1680年）”である。これらは一般的に“インディアス法”と呼ばれているが、そこで述べられている数々の条文は、実際の都市建設に際して適用された規範というよりは、むしろ、その建設の過程における知見やあるべき姿を統合的に編纂したものと理解されている。本論文はこうしたインディアス法に記載されている規範がどの程度、実際の都市において実現されていたのか、また、その痕跡が現存する都市にどの程度、遺っているのかについて、図象学的に検証したものである。対象としたのは、現在のメキシコ領内に遺っている270の植民都市で、その内の22都市、31街区について詳細に検討している。

論文は5章からなり、アペンディクスに資料集がある。

第1章は、スペイン人が新大陸に入植した当時の歴史的な状況についての解説で、テオティワカンのような幾何学的な整合性の高い都市が既に存在していたこと、既存の都市に重ねるように植民都市が建設されたこと、また、建設に際してさまざまな規範が行政官により布告されたが、それらを再編纂したのがフェリーペ2世法とカルロス2世法で、これらのインディアス法に基づき、中心に矩形の広場を持ち、格子状の街路を有する植民都市が建設されたことを述べている。

第2章は、格子状の街路を持つ都市の歴史とその幾何学的な特性についての解説で、世界の都市について概観した後に、新大陸の植民都市についてその形態を分析している。1492年から1810年の間に、新大陸では911の植民都市が建設されたが、当時のメキシコ領内にはその内の270が存在した。

第3章は、具体的な分析方法の解説で、まず、分析対象をメキシコ領内に遺る格子状の街路を持つ植民都市で、かつ、古地図が残存し、それと比較する航空写真や衛星写真が入手可能な都市に限定している。こうした都市には共通事項として、1) 中央広場がある、2) 直線的な街路である、3) 矩形の街区から成る、4) 広場に面して、教会、行政府、

商業施設、宮殿などの公共性の高い建築物があることが挙げられる。建設当初の姿を知るための図象データとして、スペインのセルビア市にあるインディアス古文書館の古地図の写真を用い、また、それと対比する資料として、メキシコのINEGI、SINFAの航空写真やNASA、GOOGLE EARTHの衛星写真を用いる。これら新旧ふたつの基礎資料が揃っているメキシコの都市として、22都市、31地区を選定し、それらの街路、広場、ゾーニング、街区等について幾何学的な性状を分析している。次いで、インディアス法を1次元情報、古地図を2次元情報、現在の物理的な都市空間を3次元情報とし、更にこれらを画像処理した上で重ね合わせたものを4次元情報と位置づけ、これらを時空間データを重ね合わせたものとして分析する手法について説明している。

第4章は、カルロス2世法の条文の中で都市建設に関係する部分についての解説で、これを1次元情報として整理している。次いで、これらの条文がどのような都市空間を想定したものであるかについて、3次元のグラフィカルな表示を行っている。これらインディアス法の条文が都市の物理的な構造とどのように対応しているかを調べるために、都市のどの部分に着目すべきかについて検討し、16項目のチェック項目を選定している。このチェックリストに基づき先に選択した31の地区のデータ分析を行っているが、各地区毎のオリジナルの資料と共に画像処理された映像と解説があり、分析の結果が示されている。

第5章は、全体のまとめで、インディアス法の各条文が実際の都市においてどのように適用され、遵守されてきたかについての総合的な分析を行っている。その結果として、遵守の厳密さに違いがあり、これが植民都市の類似性と差違性を生んでいることを明らかにしている。

アペンディクスは、カルロス2世法の条文と収集した画像などを資料集としてまとめたものである。

以上要するに、本論文は、新大陸の植民都市に共通して見られる幾何学的な整合性について、その根源となるインディアス法に遡り、その実現化の状況を包括的に分析したもので、従来の限定的な都市に対する個別的な分析とは異なり、網羅的な分析を行なうことにより、その共有性を明らかにしている。新大陸に限らず、一般的に植民都市は幾何学的な整合性が高いが、その理由として、統治のしやすさや、交通の便、わかりやすさ、空間の序列化、拡張の可能性などが指摘されているが、本研究により、すべての都市に共通する事項と、そうでない事項とがあることが明確になり、単に効率性のみからその形態が決定されているのではないことが明らかになっている。必ず守らなければならない規範とそうでないものを状況により使い分けることにより植民都市が建設されていることを、膨大なデータを画像処理することにより実証した本論文は、歴史的な都市の分析を超えて、都市論としても貴重な研究で、現実の都市計画に対する示唆をも含んでいる。これは建築計画学、都市計画学の基礎的研究として有用で、その意義は大きいものと判断される。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。